

## 日本神話の星と宇宙観（3）

勝 俣 隆

〈長崎大学教育学部 〒 852 長崎市文教町 1-14〉

### あめ みはしら 天の御柱の解釈

今回は、古代日本人が、天空の回転ということに関して、どのような見方をしていたのか考察したい。

日本神話には、世界最初の島である淤能基呂島（おのごろしま）に、伊邪那岐命（いざなぎのみこと）と伊邪那美命（いざなみのみこと）が天降り、天の御柱（あめのみはしら）を立て、その周囲を巡って結婚し、日本の島々を生むという国生み神話がある。古事記は、次のように描く。

伊邪那岐命詔（の）りたまひしく、「然らば吾と汝と是の天の御柱を行き廻り逢ひて、美斗能麻具波比為（みとのまぐはひせ）む。」……乃ち「汝は右より廻り逢へ、我は左より廻り逢はむ。」と詔りたまひ、……

古事記では、結婚に当たり、男性の伊邪那岐命が左廻り、女性の伊邪那美命が右廻りに廻って、出会った所で結婚することになる。一方、日本書紀では、最初、

伊弉諾尊（いざなぎのみこと）・伊弉冉尊（いざなみのみこと）……即ち天柱（あめのみはしら）を巡らむとして約束（ちぎ）りて曰はく、「妹は左より巡れ。吾は当に右より巡らむ」とのたまふ。

とあって、古事記とは逆に、女性が左、男性が右から巡るが、結婚した結果が良くなかったとして、占いをして、今度は次のように、古事記と同じ方向に廻り直す。

故、二の神、改めて復（また）柱を巡りたまふ。陽神（をがみ）は左よりし、陰神（めがみ）は右よりして、既に遇（あ）ひたまひぬる時に、……

こうして、今度は、結婚がうまく行き、無事に日本の島々を生むことになる。

このように、伊邪那岐命（伊弉諾尊）と伊邪那美命（伊弉冉尊）は、何故、天の御柱（天柱）を男神が左廻り、女神が右廻りに廻って結婚し、日本の島々を生み出すのか。

従来解釈は、天の御柱とは、家屋の柱、あるいは、野原等に立てられた豊穡の柱、または、ヨーロッパ諸国のメイ・ポウルのように、町の広場に立てられた柱で、その廻りを人々、中でも、男女が巡って、結婚の相手を選ぶ儀式の反映だとする見方が支配的であった。確かに、古代日本には歌垣（うたがき）といって男女が集まり、歌を詠み合っただけで配偶者を選ぶという風習は存在したが、それが、柱の廻りを廻ったというのは、文献的にも、民俗学的にも、例がなく、証明されていないことである。また、粟の農耕儀礼として、小正月に、夫婦が裸で囀（いり）裏の周りを廻る東北地方の山村に残る風習の反映だとする見解もあるが、その行事が何時からあるものか不明であるし、夫婦が同方向へ廻る点にも疑問がある。また、囀裏と天の御柱では、イメージが違い過ぎる。

そこで、そもそも天の御柱をどう理解すべきか検討したい。日本書紀に次のような記述があるのが注目に値する。

伊弉諾尊・伊弉冉尊、……共に日の神を生みまつります。……是の時に、天地相去ること未だ遠からず。故、天柱（あめのみはしら）を以て、天上に挙ぐ。次に月の神を生みまつります。……故、亦（また）天に送りまつる。

この記述では、天柱（天の御柱）は、太陽神・月神を天上世界へ送るための通路とされている。

これは、明らかに天柱が、天地を繋ぐ壮大な柱として観念されたことを示している。実際に古事記や日本書紀で、「天」が付く言葉は、天上世界と関わりを持つ例がほとんどであって、天柱が宇宙的な規模の表現であることは、その意味において極めて自然なのである。また、「柱（はしら）」は、橋（はし）や箸（はし）と語源的に同じものと考えられており、橋が離れた二地点を結び、箸が人の手と食べ物を結ぶように、柱は、家においては、屋根と地面という離れた二地点を結ぶものと言える<sup>1)</sup>。それ故、天の御柱（天柱）の場合は、天と地という離れた二地点を結ぶものと判断されるのである。

つまり、家屋の柱が大地と屋根を接続し、屋根を支えるように、天の御柱（天柱）は、大地と天空を接続し、天空を支え、長い形状で屹立しているものであり、その周りを伊邪那伎・伊邪那美二神が巡って結婚すると理解すべきでなかろうか。

そして、伊邪那岐命・伊邪那美命の二神が、天地を結ぶ大きな柱の周囲を廻るということは、この伊邪那岐命・伊邪那美命の二神も巨大な神であることを連想させる。事実、伊邪那岐命は、日向の橋（きり）の小門（かど）で行われる禊（みそぎ）祓（はら）によって、天照大御神（あまてらすおほみかみ）・月読命（つくよみのみこと）・速須佐之男命（はやすさのをのみこと）の三貴子を生むが、いずれも、伊邪那岐命の眼・鼻から生まれている。太陽や月は、天の神や世界巨人の眼であるという見方が、旧大陸の高文化地帯を中心に世界的に見られることが指摘されているが<sup>2)</sup>、その点から言えば、まさに伊邪那岐命は、天父神のイメージを持とう。一方、伊邪那美命は、火の神を生んで火傷を負い、「多具理」（嘔吐）をして死ぬが、これは噴火口からの火の出現や溶岩の流れを表わしたものとされており<sup>3)</sup>、また、死の間際に生み出す神が、鉾山の神や粘土の神、農業や生産の神ばかりであることは、この伊邪那美命が大地の神、即ち、地母神の性格を持っていることを想起させよう。最後に伊邪那美命が地下の死

者の国である黄泉国（よみのくに）の大神となるのも、地母神であることと無縁ではなかろう。

そして、伊邪那岐命・伊邪那美命が、それぞれ天父神・地母神という巨神であればこそ、この日本の国を大八島国（おほやしまくに）という大きな島の形で生み出すことができたのではないかと思われるのである。

以上の考察から、天の御柱神話とは、巨大な伊邪那岐命・伊邪那美命が、巨大な天の御柱の周囲を逆方向に廻って出逢い、結婚する神話であると言えよう。その時、何故、二神は、左右の逆方向に廻るのか。

この点については、中国の古代神話・古代の世界観の影響が見られるようである。

- ①天は左旋し、地は右動す。（『春秋緯』元命包（しゅんじゅうい げんめいほう））
- ②天は左旋し、地は右周す。（『芸文類聚』天部（げいもんるいじゅう てんぶ）所引の白虎通（びやくこつう））
- ③夫れ天は左転し、地は右廻す。……此物事の常理也。……故に必ず男は左転し、女は右廻すべし。（『医心方』所引の洞玄子（どうげんし））

①から③までの、中国の古文獻に描かれた世界観は、天は左旋し、地は逆に右旋するというものである。これは、天の御柱巡りの神話を理解するために大いに参考になろう。上述のように、伊邪那岐命と伊邪那美命は、それぞれ天父神・地母神の性格を持っていたと考えられる。それ故、天の御柱巡りで、伊邪那岐命が「左より廻り」、伊邪那美命が「右より廻る」のは、まさに、「天は左旋（転）し」「地は右動（周・廻）す」ことに相当すると判断されるからである。この「天は左旋（転）し」「地は右動（周・廻）す」ということは、具体的には、如何なる状態を指しているのであろうか。

古代中国人の世界観では、蓋天説と渾天説（がいてんせつ こんてんせつ）が有名だが、地下の描写を別にすれば、半球状の天が大地を覆っているとする点は共通している。そして、天は、星・太陽・月を含んで、北極星を中心に反時計廻りに回転していることを、太古の時代から認識していた。つまり、「天は左旋（転）す」というのは、古代中国人が北の空を見上げた時、

北極星を中心に、天空が反時計廻り、即ち、左廻りに回転していることを指したものと判断されるのである。

一方、天空が北極星を中心に左廻りに回転すれば、大地は、その逆に必然的に右廻りに回転しているように見えるであろう。それが、「地は右動（周・廻）す」という表現を生み出したのではないかと推測される。

ここで、注目すべきは、「天は左旋（転）し」「地は右動（周・廻）す」という表現は、北極星を中心とした回転運動であったことである。という事は、逆に考えれば、天父神伊邪那岐命・地母神伊邪那美命の左右への旋回運動も北極星を中心としたものと見なすことができるということの意味しよう。つまり、天の御柱とは、北極星を柱に見立てた神話的表現であった可能性が出て来るのである。

天の御柱は、上述の如く、天地を繋ぐ長大な柱と推定されたから、天上の不動の星としての北極星のイメージとは異なるのではないかという意見が出てくるかも知れない。ところが、北極星を、天の中心にある杭・柱と見なす見方は、汎世界的広がりを持った見方なのである<sup>4)</sup>。

ウノ・ハルヴァの『シャマニズム アルタイ系諸民族の世界像』では、次のように述べている。

天蓋は北極星のあたりを中心に規則的に回転している。……あの神秘的な天の中心は、北半球に住むすべての民族の注意をすでに早くから集めて来た。大地のへそのほかに、アジアとヨーロッパの多くの民族は《天のへそ》あるいは《天の轂（こしき）》とも言い、このことばでほかならぬ天の回転の中心点を指していた。……天蓋はそのへそのまわりを規則的にまわるのであるから、人間は、天蓋がそこで留めてあるのだと考えた。多くの北方諸民族は、それ故、北極星を《釘》と名付けている。……天の神秘的な円運動は、さらにすすんで釘より

も強く頑丈な一種の巨大な柱あるいは軸という観念を呼び起こし、天はその尖で支えられてまわっていると考えた。アルタイ系諸民族もまた、これと同じように北極星を命名している。モンゴル、ブリヤート・カルムクは《金の柱》、キルギス、バシキール、西シベリア・タタール諸族は《鉄の支柱》、テレウトは《鉄の杭》、ツングース、オロチョンは《金の柱》と呼んでいる。

このように、シベリアの諸民族には、北極星を柱に見なす観念が普遍的に存在している。シベリア諸民族と日本人は、血液型から判断しても、民族的に極めて近い民族と言われ<sup>5)</sup>、また、従来から、神話的な世界観が類似していることが、指摘されてきていた。それ故、わが国の天の御柱巡りの神話は、基本的には、アルタイ系諸民族の世界観と同じく、北極星を天地を繋ぐ柱と見なす観念から成り立ったのではないかと推測されるのである。

日本の方言でも、北極星の方言で、「きたの一つぼし」「きたのいってん」等のように、唯一不動の星と見る見方は多いし、「しんぼし（芯星）青森県他）」「しんぼう（心棒）島根県」という方言は、北極星を星空の回転軸、即ち、天空を支える柱と見なしたものであり、日本にも、同様な見方があったことが知られるのである<sup>6)</sup>。

文献上の記録でも、平安時代以来、瀬戸内海の海賊として活躍した能島家の記録には、次のような一節がある。

一、北辰の事、只一つ此星ありて平生不動星也、是を北辰の極と云也。……四三の星、一つ星などて用るは船中にて方角を知らん為也。（『能島家伝』巻五「日和見様の事」）

北極星が不動の中心の星として、古くから知られ、航海における方位の指標となってきたことが窺われる。

中国でも、次のような記述が知られている。

- ①子曰く、政を為すに徳を以てす。譬へば北辰の其の所に居て衆星の之に共(むか)ふが如し。(論語・為政篇)
- ②北極の紐星を枢と為す。星動かざる処なり。(隋書天文志)

北極星が北の空で動かず、枢軸の如き存在とされたことを示す記述である。特に、論語・為政篇の記述は、北極星に仕えるように、他の星々が、その周りを廻っていることを、古代中国人が熟知していたことを示している。

その点、注目されるのは、次の記事である。

崑崙山(こんろんざん)は柱たり。気は上りて天に通ず。崑崙なる者は地の中なり。(『河図括地象』前漢末)

これは、崑崙山を、大地の中心にある柱に見なした表現である。また、『東方朔神異経』では、

崑崙に銅柱有り。其の高きこと天に入る、所謂(いわゆる)天柱なり。

とあり、崑崙山には、銅柱が有って、天まで達しており、それを「天柱」と呼ぶことが明記されている。

曾布川寛氏は、「崑崙山と昇仙図」の中で、次のように述べられている<sup>7)</sup>。

崑崙山は大地の中央に位置し、柱の如き形状をして、その高さは天にまで達する山である。大地の中央というのは、崑崙山の直上空に天帝の居があったことと関連し、天帝の居である北辰(北極)が天の中心に位置するのに対応して、地の中央に位置すると考えられたのである。

即ち、崑崙山は大地の中央から天の中心である北極星に向かって聳え立つ柱状の山であり、「天上と地上をつなぐ通路」(同氏)であったのである。これは、古代中国人も、アルタイ系諸民族と同様に、北極星の位置に、天地を繋ぐ壮大な柱、即ち「天柱」を想定し、それを崑崙山そのもの、あるいは崑崙山から突き出る銅柱と同一視したことを示していよう。つまり、崑崙山自体が、不動の北極

星を、世界の中心で天空を支える柱状の高山に見なしたものであったと言えよう。

ミルチャ・エリアーデの『永遠回帰の神話』の中でも、次のように述べられている<sup>8)</sup>。

インド人の信仰に拠れば、メル山は世界の中心に聳え立ち、その真上に北極星が光っている。ウラル・アルタイ人はまた中心の山スメルウを持ち、その頂上に北極星が固定されているという。

これに拠れば、高山の頂上が北極星と繋がっているという見方は、中国ばかりでなく、ユーラシア大陸で広汎に見られた観念と言えよう。

また、ミルチャ・エリアーデは、『シャーマニズム』の中で、「アルタイ人の間では一チュクチ人と同様に一空への道は北極星を貫通しているという。」と述べている<sup>9)</sup>。北極星が天地を結ぶ通路と観念されたことを物語るものである。

中国の『淮南子(えなんじ)』地形訓にも、崑崙の邱(おか)の上に、涼風の山、崑崙、上天という世界があり、「之に登れば乃ち神なり。是を太帝の居と謂ふ。」とあって、崑崙山が太帝(天の崇高神)の住む天上世界と通じており、天上に行くための通路とされていたことが示されている。崑崙山は、前記のように、北極星から想定された柱状の高山であるから、崑崙山を通して天上世界に行くことは、北極星を通して天上世界に行くことに他ならないだろう。

先の日本書紀の記述で、「天柱(あめのみはしら)」を通して、日神・月神が天上世界に送られるのは、まさに、「天柱(あめのみはしら)」が、崑崙山の「天柱(てんちゅう)」と同じく、北極星に由来する天空を支える柱であり、同時に、天上世界への通路ともなっていたからであろう。

以上、日本神話の天の御柱巡りの神話は、アルタイ系諸民族を初めとする多くの民族と同様に、北極星を天地を繋ぐ柱と見なす観念から成り立ったもので、北極星が宇宙の中心と観念されたために、その柱のある場所も、世界の中心・宇宙の中

心である聖なる場所とされ、その柱の周囲を巡つての天父神伊邪那岐命・地母神伊邪那美命二神の結婚が聖なる結婚となり、その結果生まれる大八島国（おおやしまぐに、神話上の全世界としての日本の国）も聖なる国家として誕生したことになるので祝福されるのであろう。

それ故、伊邪那岐命が左廻りに、伊邪那美命が右廻りに天の御柱を廻るのは、天が左廻り、地が右廻りに北極星の周囲を回転することを意味している。従って、先の日本書紀の引用文で、最初、伊弉諾尊が右廻り、伊弉冉尊が左廻りに廻ったところ、結婚がうまくいかず、後で、伊弉諾尊が左廻り、伊弉冉尊が右廻りに廻り直したら、うまくいったというのは、最初は、天（伊弉諾尊）が右廻り、地（伊弉冉尊）が左廻りというように自然の摂理に反するものであったために、うまく行かず、後から、天（伊弉諾尊）が左廻り、地（伊弉冉尊）が右廻りというように、自然の巡行通りにしたら、結婚も順調であったという意味になろう。

以上、日本神話の中の天の御柱巡りによる国生み神話は、北極星で想定された巨大な柱の周りを、天を象徴する伊邪那岐命と地を象徴する伊邪那美命が廻り、出会ったところで結婚し、日本の国々を生み出すと言った壮大なスケールの神話として理解できるであろう。即ち、古代日本人においても、北極星は、不動の星として、世界の中心、宇宙の中心を示し、天とその回転を支える大きな柱として把握されていたことになる。

### 参 考 文 献

- 1) 三省堂辞書編集部, 1967, 時代別国語大辞典上代編, (三省堂)
- 2) 大林太良, 1973, 日本神話の起源 (角川書店) 他
- 3) 金子武雄, 1963, 古事記神話の構成 (桜楓社)
- 4) ハルヴァ U. (田中克彦訳), 1971, シャマニズム アルタイ系諸民族の世界像 (三省堂)
- 5) 松本秀雄, 1992, 日本人は何処から来たか 血液型遺伝子から解く (NHK)
- 6) 徳川宗賢, 1989, 日本方言大辞典 (小学館) 野尻抱影, 1973, 日本星名辞典 (東京堂出版) 内田武志, 1973, 星の方言と民俗 (岩崎美術社)
- 7) 曾布川寛, 1979, 東方学報 51, 90
- 8) エリアーデ M. (堀一郎訳), 1963, 永遠回帰の神話 (未来社)
- 9) エリアーデ M. (堀一郎訳), 1974, シャマニズム 古代的エクスタシー技術 (冬樹社)

(付記。本稿は、1994年(平成6年)5月の国立天文台談話会において発表した内容を、補訂したものです。天文談話会において、様々な御指摘・御助言を頂いたことに対し、深く感謝致します。また、『天文月報』への執筆をお勧め下さった国立天文台の渡部潤一氏や編集部の方々に厚く御礼申し上げます。)



北天の星の動き  
「遥かなる宇宙へ」より  
日本天文学会©